「只求失日少」

安　居　喜　造

「不苦去日多　只求失日少　安居喜造会長叱正　大平正芳」昭和五十二年二月十八日末広会発足二十周年を記念して、大平さんから私はこういう書をいただいた。なにごとにも行き届いた方であったから、会員の中で年長に属する私に特にこの言葉を選ばれたのであろうが、ご自身の好きな言葉でもあったに違いない。

大平さんは、池田総理の秘書官時代どちらかといえばブッキラ棒な青年であったが、私は何時とはなしに大平さんに兄事していた。一国の首相たり得る器量と識見を備えた方であったから当然のことではあるが、私が傾倒したのはむしろそのお人柄であった。

大平さんはいつも誰に対しても礼儀正しく温かい思いやりを忘れず、どんな困難に遭遇しても黙々とこれに耐え、こまめに全国を歩き、地方の多くの青年に接し、一生を通じて書を愛し、静かに思索の時を求める人であった。大平さんはまたいつも謙虚で、功は人に譲り、争いを好まなかった。日米繊維交渉の時も、最初にスタンズ長官と辛抱強く交渉し、公正な解決を図ろうと努力されたのであるが、当時の関係者であった私達仲間でさえ、その労を知る者は極めて少ないし、日中共同声明成立についても、毛主席と周総理の見識と決断、田中総理の英断のみが称えられるのである。

このような大平さんは総理総裁の座につかれても、いささかの気負いもなく自然体で「信頼と合意の政治」「正しい姿勢の政治」に取り組んでこられた。しかし客観情勢は海外各国との広範な首脳外交、一昨年秋の総選

挙につづく東京都知事選、昨年六月の参議院選挙等、とみに慌しくなった。

大平さんが信念とされた正しい政治姿勢とは、人々の甘えに迎合しない毅然たる姿勢をいうのであろう。されば こそ施政方針演説で増税の必要性を強調し、政治に対する国民の過剰な期待を戒め、日本の国際的役割を明確にし、二十一世紀を展望した諸政策実現のため政局の安定を強く訴えられたのである。ところがどういうわけか、大平さんの真意に対する論議は一切棚上げのまま、まことに聞くに堪えぬ誹謗のみが集中し、大平さんを知る者にとっては全く思いもかけぬことであった。こういうさなかのある夕、友人四、五名で大平さんと中国料理を共にした。少し遅れてお見えになった大平さんを見て私は思わずハッとした。三十年来のおつきあいで初めて見る苦渋に満ちた顔がそこにあったからである。しかし大平さんは座に着かれるとすぐ、いつもの温顔に笑みを浮がべ、雑談に興じながらさも旨そうに箸を運んでおられたが、しばし私は眼底熱するを禁じ得なかった。

またある日、私は大平さんを首相官邸にお訪ねしたことがある。官邸の執務机に一冊の新刊書の置いてあるのを見て「お忙しいのに」「いや、拾い読みですよ」。こんな短い会話のなかに、ひとときの心の安らぎを一冊の本に求めようとされる首相の孤独の姿を見たのである。

政局は大平さんの孤独な死闘にもかかわらず遂に衆参同時選挙という異例の事態にまで発展した。

しかし、大平さんが愛し続けた日本の真面目な大衆は、決して「ほんもの」を見失わなかった。選挙は大平さんの率いる自民党が大勝し、大平さんの悲願であった政局の安定は実現した。しかし大平さんはこの事実を現世で見ることなく、選挙のさなか、卒然と逝去されたのである。

若い頃から常に反省と自誨を怠らず、人には優しく己には厳しく、ひたすら失日の少なきを求めて七十年を生き抜いてこられた大平さんのまことに壮絶な最期であった。

（前東レ会長）